
いじめられっ子の十高統一（前）

伊藤一步

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いじめられっ子の十高統一（前）

【Nコード】

N5533Y

【作者名】

伊藤一歩

【あらすじ】

小中といじめられてきた“岡中仁”

しかしあることがきっかけでケンカの才能が開花。

ヤンキー高校のトップを張ることになる…

次々と明らかになる事実。その事実によって生み出される憎しみ、復讐。

果たして憎しみや復讐の果てには何が待っているのか。

憎しみ・復讐が生むもの(前書き)

いじめられてきた男の意外な才能

憎しみ・復讐が生むもの

ジーン、ジーン、蝉の鳴き声が雨のように降り注ぐ暑い夏。

「ガシャンッ」

食器が落ちる音。

「わーん。わーん。」

泣き出す女子。

『最悪だ…、またやっちゃった…。』

「岡中君！何回食器落とすの！！食器運ぶ時はあれほど慎重にって言ったでしょ！」

怒鳴る先生。

先生ってというのはどうしてこうも偉そうなのか。先に生まれると書いて「先生」。ちょっと先に生まれたからって偉そうに。

当時10才、小学4年生の僕には到底わからない疑問だった。

とりあえず女子に謝り、牛乳臭い雑巾を持ってくる。床に無様に広がったカレーを拭き取る。数人の女子が手伝ってくれた。自慢ではないが僕は他人よりも顔が整っている。いわゆる「イケメン」というやつだ。ただ無心にカレーを拭き取っていると、クラスのお調子者である佐野光が教室に響き渡る声で

「どうした！？お前！？もらったのか！！！？」

教室に笑いの渦が巻き起こる。僕が何も言い返せずにいると、一緒にカレーを拭いていた女子が

「ちょっと！？佐野君ひどいよ！！岡中君に謝って！」
と言った。すると佐野は

「なんだなんだ！？お前もうんこマンの仲間か？」
とちよげた声で言った。

言うまでもなく次の日から僕のあだ名はうんこマンになった。小4の僕には耐えられない苦痛だった。しかし小学校6年生になる頃に

はその単語を言うことすら恥ずかしくなったのか、僕をつんこマンと呼ぶ人は1人もいなくなった。しかしその分肉体的ないじめが多くなった。放課後にはいつも誰にもバレないところで誰にもバレないところにパンチや蹴りを何発も何発もくらった。母にバレないように風呂に入るのが僕の日課となっていた。

母は女手一つで僕を育ててくれた。父は僕が5才の頃に亡くなった。明らかに赤だつた信号を突っ切ってきた車に跳ねられたそうだ。母は昼間パートをしてなんとか生活費を稼いでくれていた。僕はそんな母にいじめのことなど相談できる訳もなく、そのまま地元の中学校に入学した。もちろんその中学校でもいじめは続いた。『母に心配かけないために…』その思いだけで3年間いじめに耐えた。支えてくれるのは愛犬のシロとわずかな女子だけだった。

僕は頭が悪かった。中3の三者面談では先生に「この成績では公立だと白金高校しろかねしかありませんね。まあ、私立ならもつとまともな高校もありますけどね。」

と言われた。白金高校というのはこの辺では有名なヤンキー高校だ。酒、タバコは当たり前。万引き、恐喝などの犯罪も起こしている高校だ。母は僕に言った。

「仁、私立でもいいのよ。母さんもつと働くから。貯金だつていくらかあるしね。」妙に明るい母の声に思わず涙がこぼれそうになった。

「ごめんね、母さん。こんなできの悪い息子で。でも僕私立に行く気はないよ。白金高校に進学するから。」
泣かずに言うのがやっとだった。母はなにも言わなかった。

桜が満開の4月、どこか薄暗い白金高校の入学式に僕はいた。周りを見渡す限りヤンキーだった。そして同じクラスにはもう顔も見たくない佐野がいた。僕は佐野を見た瞬間吐き気まで催した。絶望の淵に立たされた気分だった。

『高校生活もいじめられるのか…』

そんなことをぼんやりと思った。

その日は逃げるように1人で帰った。次の日学校に行くともう力関係がはつきりしていた。中学では威張り散らしていた佐野が勝島という大男にべったりとくっついていていた。この高校では入学式の日「1年戦争」と呼ばれる1年生のトップを決める戦いがある。なんでもその戦争でトップになったのが勝島だそうだ。放課後、案の定佐野が勝島を連れて僕のところに来た。

「かつちゃん、こいつ俺の幼なじみで仁っていうんだ。こいつ最高に面白い奴で、どんだけ腹を殴られても痛みを感じないんだ。」

「まぢかよっ！だとしたら最高のサンドバックじゃねーか。」

勝島は僕の胸ぐらをつかみ思いつき腹を殴った。さすがに白金の1年トップだけあって、今まで味わったことのない痛みだった。次に勝島は僕の机の上にある電子辞書に目をつけた。それがすべての始まりだった…。

「仁、入学祝い何がいい？」

「えっ！？ああ、いいよ、そんなの。いらないよ。」

「遠慮しなくていいのよ。ほら、なんでも言ってみなさい。」

「うーん、じゃあ辞書！辞書が欲しい。」

「電子辞書？」

「いや、そんな、普通の紙の辞書でいいよ。」

「だから遠慮しなくていいって。電子辞書買ってあげる。」

「いや、ほんとにいいよ、高いから…」

「ほら、やっぱり遠慮してるじゃない。うちにだって電子辞書買うお金くらいあります。」何も言えなかった。僕は知っていた。電子辞書一つ買うことがどれだけ家計にダメージを与えるか。しかし、母の優しさを前に何の言葉も出なかった。

次の日、母は本当に電子辞書を買ってきた。

「ありがとう…」

心からでた言葉だった。その電子辞書が勝島という名の悪魔によっ

て床に投げつけられた。

「ガシャンツツ!!」

鈍く嫌な音がした。

「貧乏くせー奴が電子辞書なんか使ってんじゃねーよ。」

悪魔は笑っていた。

『殺す』

今までわいたことのない感情が突然沸点に達した。立ち去ろうとする勝島に叫んだ。

「おい！待てよ!!」

「ああん！？てめえ、誰に向かって口聞いてんだ!?」僕の顔面に向かって飛び込んでくる右フック。しかしそのフックが到達する前にカウンターで僕の右ストレートがきれいに勝島の顔面に入った。勝島はそのまま意識を失った。しかし僕の怒りはまだ収まらなかった。

「おい、佐野!! てめえもだ！散々俺をいじめてくれたな」

佐野の溝に思いつきり膝を入れる。佐野は嘔吐しながら気を失った。

「なに見てんだコラア！てめえらもやられてーのか!？」

自分の口からでた言葉とは思えなかった。しかし、よくわかんねえ奴に勝島が1発でKOさせられた、という情報は瞬く間に校内中に広がった。そして3年生のトップ、つまり白金を牛耳っている男“新妻亮”に呼び出された。

指定された薄暗い巣窟に入ると、いかにも強そうな男が数人いた。

真ん中にいる新妻という男は意外にも優しそうな雰囲気だった。

「おい、克巳！こいつとタイマンはってみろ。」すると突然パンチが飛んできた。と思っただけで勝手にワンツールのコンビネーション。しかし自分でも驚くほど軽快にこれらのパンチを避けていた。避け終えた頃にはすでに自分のつま先で相手のあごを蹴り上げていた。克巳という男は膝をつき自分の方に倒れた。

「パチパチパチ」

拍手の音。

「お前強いな！気に入った。放課後うち来い。」

「あつ、はい…」

さすがに白金のトップの誘いを断るなんてマネはできなかった。しかし今日は母の誕生日でもあった…。

小さく古びたアパートだった。家の中には誰もいなかった。新妻はニコニコしながら染髪液とハサミを持ってきた。

「ほら、ベランダ出る。これから1年のトップ張るって奴がそんなボサボサの頭じゃまずいだろ」

「えっ、トップ…?」

「そう。大丈夫だよ。俺将来美容師目指してるから。」

「いや、そうじゃなくて…」

「ほら、ほら、ベランダ出て。」

金髪のリーゼントにされた。だが似合っていた。悪い気はしなかった。なんやかんやで髪の設定が終わった頃には21時を回っていた。

「すみません、今日用事あるんで僕帰ります。」

「おう、そうか。いやー、それにしてもきまつてるで。」

「ありがとうございます。じゃあ失礼します。」

足早にアパートを去った。この髪に悪い気はしなかったが、1つ気がかりなのが母の反応だった。帰り道、僕に目を合わせる人はひとりもいなかった。財布の中から小銭をむしり取りなんとかケーキを買った。

家に着くと僕を見た母は泣き崩れた。予想はしていたがここまでとは思わなかった。

「母さんごめんね、すぐに黒に染め直してくるから。」

母は弱々しい声で言った。

「仁、違うの…、母さんね、嬉しいの…」

「えっ?」あまりに意外な言葉に声が裏返った。

「母さん本当は知ってたの、仁がいじめられてること。でも仁があまりにも必死に隠すから言えなかったの。ごめんね。」

実はね、お父さんも白金出身なのよ。白金でトップを張ってたの。白金の龍って言ったら知らない人はいなかったわ。だからあんたにも、あんたにもお父さんの血が流れてるんだなあって、母さん嬉しくて。」

僕は言葉が出なかった。全く知らなかった事実を突きつけられ何も考えることができなかった。その夜は無言で、買ってきたケーキを食べた。

次の日学校に行くと地位も外見も別人のようになつた僕を好奇の目で見る人、嫉妬に燃えた目で見る人……いろいろな人がいた。そして復讐の目で見える人もいた。

そう、“勝島”だ。

「俺とタイムンはれ」

そう吐き捨てて学校の裏庭に出て行った。しかし情報というのは速く回るものだ。いつ聞きつけたのか、すぐに新妻さんが現れた。

「お前なら負けねーよ。」

実に勇気が出る一言だった。新妻さんが見守る中、勝負は始まった。まず仕掛けたのは僕だった。ほんとうに父さんの才能を受け継いだのか、信じられないくらいスムーズにパンチがでる。そしてそれが的確に急所に入る。相手はみるみるうちに身体がふらついてくる。

顔もパンパンだ。とどめのアッパーを入れるとバシャリツという音と共に倒れた。

「やっぱりつえーな。」

新妻さんがつぶやいた。

「龍って知ってますか？白金の龍……」

「もちろん知ってるよ。我が母校の偉大なる先輩だ。」

「それ、僕の親父なんすよ……」

「えっ！！？まだでかっ??」

「岡中龍……」

「お前が強いわけだ。」

「父さん、どんな人だったんですか？」

「俺もよくは知らないが、なんでも十校統一に一番近かった人だそうだ。」

「十校統一？」

「なんだお前？知らないのか？この西地区に存在する十校の不良高校を統一する。西地区に住む不良達の夢だ。」

「不良達の…夢。」

「俺だつて狙つてる。戦争は冬に行われ、相手高校のトップの学ランを奪ったらその高校を統一したとみなす。」

憎しみ・復讐が生むもの（後書き）

憎しみは憎しみしか生まない。

復讐は復讐しか生まない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5533y/>

いじめられっ子の十高統一（前）

2011年11月18日00時20分発行